

ルカによる福音書4章「神の国の宣教の始まり」

1A 悪魔による誘惑 1-13

1B 御霊の導き 1-2

2B あらゆる試み 3-13

2A 諸会堂での教え 14-30

1B ガリラヤでの受け入れ 14-15

2B ナザレでの拒否 16-30

1C 恵みによる解放 16-21

2C 外で行われる御業 22-30

3A 教えにある権威 31-44

1B 悪霊の追い出し 31-37

2B 熱病の癒し 38-41

3B 別の町々 42-44

本文

ルカによる福音書4章を見ていきたいと思えます。私たちは午前礼拝で、イエス様が私たちの模範となってくださったことについて学びました。そのテーマで、4章全体を眺めてみたいと思えます。主が、民の間でバプテスマを受けられたのは、私たちと一つになり、手本を示すためでありました。主は、私たちの負い目のために贖い、救いとなってくださると同時に、私たちキリスト者がこの方に付いて行くための見本にもなっておられます。

1A 悪魔による誘惑 1-13

1B 御霊の導き 1-2

1 さて、イエスは聖霊に満ちてヨルダンから帰られた。そして御霊によって荒野に導かれ、2 四十日間、悪魔の試みを受けられた。その間イエスは何も食わず、その期間が終わると空腹を覚えられた。

イエス様は、ヨルダン川で水のバプテスマを、ヨハネから受けられた時に、聖霊がこの方に降って来てくださいました。そのことによって主は聖霊に満たされました。私たちがいかに、聖霊に満ちていくことが必要であるか、午前礼拝で学んだとおりです。そして主が、ガリラヤにおいて神の国の福音を宣べ伝える、宣教を行われるのですが、その前に御霊はイエス様を荒野に導かれるのです。ヨルダン川に入られてから、対岸にはユダの荒野が広がっていますが、そこへ行かれたのでしょうか。

そして、四十日間の悪魔の試みを受けておられます。四十日、しかも荒野にて思い出すのは、イスラエルの荒野の旅です。イスラエルがカデシュ・バルネアから、12人をそれぞれの部族から約

東の地へ遣わし、そこの動向を調べさせました。ところが、ヨシュアとカレブ以外は悪い知らせをもたらして、イスラエルは不信仰に陥り、エジプトに戻ろうと言い出しました。神は、その四十日を年に数えて、四十年の間、荒野をさまようままにさせ、二十歳以上の大人が全て死ぬまでそこにさせました。そして新しい世代が約束の地に入らせることにしました。イエス様は、バプテスマの時と同じように、人々と同じ試みを受けるように導かれていたのです。

「その間イエスは何も食べず、その期間が終わると空腹を覚えられた」とありますが、断食は初めの数日は空腹感でいっぱいですが、それが越えるとその感覚が軽減されるそうです。けれども再び空腹になった時に何も摂取しなければ、それは飢えで死ぬことを意味します。その時に悪魔がイエス様を試みました。

2B あらゆる試み 3-13

3 そこで、悪魔はイエスに言った。「あなたが神の子なら、この石に、パンになるように命じなさい。」

4 イエスは悪魔に答えられた。「『人はパンだけで生きるのではない』と書いてある。」

悪魔の誘惑は、初めに「あなたが神の子なら」というところにあります。彼の企みは、父なる神が御子に対して、「3:22 あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」と言われた、その関係性に対する攻撃なのです。何とかして、神からイエス様を引き離すべく画策しています。御霊の導きによって、私たちも神の子どもとされたことを午前礼拝で学びましたが、私たちも何とかして、キリストにある神の愛、その関係性から私たちを引き離そうと悪魔は画策しています。

そして誘惑は、「この石に、パンになるように命じなさい」というものです。今、食べなかったら死んでしまうという切実な時に、父なる神との関係から来ている、その全能の力を自分の空腹を満たすために使いなさいと誘っているのです。それに対してイエス様は、申命記からの御言葉を引用し、「人はパンだけで生きるのではない」と言われて対抗しておられます。

私たちには、生活の必要があります。生きなければいけません、それがパンの象徴していることです。しかし、人間はそれだけの存在ではないことを教えています。神との関係があつてこそ、人が人として生きることができるのです。午前礼拝でお話したように、人は神の霊によって生きており、それが真実な人間の姿なのです。毎日の生活があるから、ということで、あまりにも多くの人たちが霊的生活、つまり神を御霊と真実をもって礼拝するというのを置き去りにしています。そして毎日の生活の中で、何を食べるか、着るかという思い煩いで、神を第一にしないようにそのかす誘惑が、至るところにあります。しかし、イエス様はその誘惑に対抗されたのです。そして、その誘惑に打ち勝ったイエス様が、私たちのそばにおられるのです！助けを呼ばない手はありません。

5 すると悪魔はイエスを高いところに連れて行き、一瞬のうちに世界のすべての国々を見せて、6 こう言った。「このような、国々の権力と栄光をすべてあなたにあげよう。それは私に任されていて、だれでも私が望む人にあげるのだから。7 だから、もしあなたが私の前にひれ伏すなら、すべて

があなたのものとなる。」8 イエスは悪魔に答えられた。「『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい』と書いてある。」

悪魔の次の誘惑は、「自分が支配していく」という誘惑です。イエス様は、世界のすべての国々を神のもとに引き寄せる働きの中にいます。「詩 2:7-8 「私は【主】の定めについて語ろう。主は私に言われた。『あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。地の果ての果てまであなたの所有として。』ですから、悪魔のここでの誘いは実に神の御子、メシアが父から与えられている約束そのものなのです。しかし、そこで条件がこうなっています。「もしあなたが私の前にひれ伏すなら、すべてがあなたのものとなる。」悪魔にひれ伏せ、と言っているのです。しかしイエス様は、同じく申命記から御言葉を引用し、「あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい」と言われています。イエス様は確かに、すべてのものを支配されます。しかし、それは人々に仕え、まさに人々の咎や罪の身代わりとなるところまで仕え、それで父なる神がこの方を甦らせることによって実現するのです。イザヤ書 53 章には、こう書いてあります。「53:12 それゆえ、わたしは多くの人を彼に分け与え、彼は強者たちを戦勝品として分かち取る。彼が自分のいのちを死に明け渡し、背いた者たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする。」

人には、心の欲望として「主なる神ではなく、自分が支配したい」という願いがあります。神を礼拝するのではなく、自分の願うとおりにしてほしい。自分のしたいことができるようにしてほしいと願います。そして、それをかなえてくれる対象が偶像となります。偶像を礼拝している人は、実は自分自身を礼拝しているのです。自分の思うとおりにならない時に、激しく怒ることがありますね。すねたり、泣いて訴えたり、とにかく自分の思惑通りになるべく、あの手、この手を使います。それは、自分が支配したいと思っていることなのです。私たちの内に潜む自分中心主義は、世界の中心に自分を置きたいという欲望であります。高ぶりであり、まさにそれが悪魔の犯した罪でありました(イザヤ 14 章)。

そしてそれが、主にお仕えしている中で出て来るのです。なぜか？ イエス様が仕える人として来られて、十字架の死にまで仕えられ、神が甦らせ、今は神の右の座に着いておられます。そしてキリストにつく者は、同じく仕えるように召され、キリストの死と命を身にまとい、そして主が戻って来られて甦る時は、主と共に座に着き、主と共に地上に神の子として現れることが約束されているからです。主にお仕えすればするほど、自分が中心になりたいという欲で、悪魔が私たちをおびき出そうとしてきます。

9 また、悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、こう言った。「あなたが神の子なら、ここから下に身を投げなさい。10 『神は、あなたのために御使いたちに命じて、あなたを守られる。11 彼らは、その両手にあなたをのせ、あなたの足が石に打ち当たらないようにする』と書いてあるから。」12 するとイエスは答えられた。「『あなたの神である主を試みてはならない』と言われている。」

ルカは、注意深く、イエス様がエルサレムに連れて来られる様子を描いています。お生まれになってから間もなくして、マリアとヨセフが幼子を主の宮に捧げるところから始まり、12歳の少年のイエス様が主の宮に留まって、教師たちと話しておられたところもありました。そしてルカは、エルサレムに向かうイエス様の姿を細かく描いていきます。エルサレムに近づいた時には、その破壊を前もって知っておられたので、嘆いて、泣いておられました。

そこで悪魔が何をやらせたか？と言いますと、「あなたが神殿の屋上から落ちて、それでも守られるのを見れば、そこにいる人々はあなたを神の子、キリストとして認めるだろう。」ということです。イエス様が御言葉によって対抗しておられるから、悪魔も詩篇にある神の約束を使って、そうするように誘いました。しかしイエス様は再び申命記の言葉を使い、「主を試してはならない、とも書いてある」ということで退けたのです。

このように申命記からの言葉で対抗しておられるのは、申命記にある大きなテーマを見ればよく分かります。そこでは主の御声に聴き従えばこれこれの祝福があるが、そうでなければ呪われるという神の警告があります。そしてイスラエルの民は実に、聞き従わないで背いたために、それで神の呪いがそのままその国に襲った歴史だからです。そこでその申命記の言葉を使ってイエス様が対抗されたことによって、希望があるのです。「ここに、真のイスラエルの姿がある」ということです。イスラエルが失敗してしまったけれども、ここに初めて正しく生きた人がいるということです。父祖がそのように失敗をしてしまいましたが、キリストにあって新しく、悪魔に勝利する道が与えられているということです。私たちにも、希望があります。自分たちでは、これらの誘惑に打ち勝つことは到底できません。けれども、既に打ち勝った方がおられます。この方を信じるこそが、私たちの勝利なのです。「Iヨハ5:5 世に打ち勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。」

話を、神殿の頂から落ちるところに戻りたいと思いますが、ここでは「人に認められる」という誘惑です。父なる神に、「わたしはこれを喜ぶ」と認められているのに、神ではなく、人から認められたいと願うことです。イエス様は、むしろご自身が宣教の働きをしていて、初めは受け入れられていましたが、次第に付いてきている人々と心が変わって来て、ついに十二人の弟子たちも見捨ててしまうというところにまでなりました。そしてその究極のあざけりが、十字架に主がかけられている時にありました。「23:35 あれは他人を救った。もし神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ったらよい。」まさにこれは悪魔に感化された声ですが、実に身近なことですね。何なら、その力を見せて見なさい。試し、挑戦するのです。

人々は、そのように自分に見えるものを欲しがり、要求します。イエス様の肉の兄弟たちも、こんなことを言いました。「ヨハ7:4 自分で公の場に出ることを願いながら、隠れて事を行う人はいません。このようなことを行うのなら、自分を世に示しなさい。」ですから、神に仕える時には人々から認められる方法で、よく見えるようにやっていく誘惑があります。しかしイエス様は、御父から認められ、喜ばれることのみを求めておられました。この方から命じられることのみで忠実であられ

たのであり、人々から受け入れられ、喜ばれることは二の次だったのです。このことは、私たちには常に霊的な問題として立ちはだかります。イエス様が山上の垂訓で、人に見られるために良い行いをするのをやめなさい、と言われました。その報いがある人々からのもので終わってしまい、天には報いがないからだ。隠れたところで行ないなさい、そうすれば天の父が報いてくださる、ということと言われましたね。

13 悪魔はあらゆる試みを終えると、しばらくの間イエスから離れた。

悪魔はあの手、この手を使いました。不気味なのは、「しばらくの間」と書いてあることです。次に出てくるのは、ゲッセマネの園においてです。イエス様を捕らえる者たちが現れました。そしてこう言われました、「22:53 わたしが毎日、宮で一緒にいる間、あなたがたはわたしに手をかけませんでした。しかし、今はあなたがたの時、暗闇の力です。」

このようにして悪魔は何とかして、主の行われていることを阻もうとしています。これからガリラヤの諸会堂で、教えておられる時に悪霊が暴れ出します。霊の戦いであることが分かります。私たちが主に従う生活を送るということは、その本質が目に見えないところで繰り広げられているという事を知るのには大切です。ヨブ記において、事の本質は1-2章に表れていました。サタンがヨブから、財産や息子、娘を奪い取り、その健康も侵したところに事の発端があります。目で見えるところで、ヨブと友人たちの中で激しい神学議論が行われていましたが、実は全く別の次元で事が起こっていたのです。私たちが、霊の戦いの中に入っているのだということを知るのにはとても大切です。「ヤコ4:7 神に従い、悪魔に対抗しなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。」

2A 諸会堂での教え 14-30

1B ガリラヤでの受け入れ 14-15

14 イエスは御霊の力を帯びてガリラヤに帰られた。すると、その評判が周辺一帯に広まった。15 イエスは彼らの会堂で教え、すべての人に称賛された。

イエス様は聖霊に満たされ、そして導きを受け荒野に行き、それから御霊の力を帯びてガリラヤに行かれました。ここではっきりしているのは、御霊の力によってその評判が周辺一帯に広まったということです。聖霊の力が強調されています。私たちが、聖霊の力を受けでないと、宣教や奉仕の働きは到底できないのだということを教えてください。

また、イエス様が断食とそこでの激しい霊の戦いを経た後であることも注目に値します。悪魔の試みによって、イエス様はご自身が神のしもべとして仕えることをお知りになられたことでしょう。あらゆる試みを経たので、これから宣教の働きをされる時に来る、いろいろな荒波にも揺るがされることなく、注意深く動き、語ることも選ばれ、何よりもその試練から出てくる聖さと強さが、人々を引き付けたのだと思います。

そしてイエス様の主な働きは、「会堂で教え」ることでした。奇跡やしるしは、これから起こって来ますが、主の教えておられることに権威があることを示すものでありました。イエス様も、宣教命令として、「すべての国民に、わたしが命じたことを教えなさい」というものでありました。しるしや不思議は、その福音の教えに伴うものでありました。

2B ナザレでの拒否 16-30

1C 恵みによる解放 16-21

16 それからイエスはご自分が育ったナザレに行き、いつもしているとおり安息日に会堂に入り、朗読しようとして立たれた。17 すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その巻物を開いて、こう書いてある箇所を目を留められた。

イエス様が、ガリラヤにある諸会堂に行かれている中で、故郷のナザレにある会堂にも行かれました。興味深いのが、「いつもしているとおり安息日に会堂に入り」というところです。主は、御霊の力を帯びておられたのですが、そのしておられることは他のユダヤ人と変わらない、また他のラビたちと変わりなく会堂、シナゴークで礼拝を守っておられたのです。聖霊の満たしや力を帯びること、聖霊のバプテスマのことを話しますと、何か、大きな、人に目立つ働きをするように見えますが、いいえ、慎み深く、忠実に、小さな事も大切にすることで御力が現れます。

ユダヤ教では、安息日ごとに読まれる聖書の箇所がどこでも決まっています。初めに、シエマと呼ばれる、信仰告白をします。「聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。(申命6:4)」そして、祈禱書にある祈りを捧げ、それからモーセ五書を朗読します。この箇所がどのシナゴークにいても同じ箇所です。そして預言書からも読みます。そして説き明かしをして、最後に祝禱です。ここでイエス様はイザヤ書の巻物が渡されて、そこを朗読します。

18 「主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、目の見えない人には目の開かれることを告げ、虐げられている人を自由の身とし、19 主の恵みの年を告げるために。」

61章 1-2節からの朗読です。イザヤ書には、メシア、キリストについての預言がいくつかありますが、ここはその一つです。まず、「主の霊がわたしの上にある。」とありますね。これは、まさに聖霊がイエス様に臨まれたところで実現しました。そして次に、「貧しい人に良い知らせを伝えるため」とあります。この貧しいというのは、必ずしも経済的な意味だけではありません。主は取税人のマタイを召し、後に同じく取税人のザアカイを救われます。彼らは経済的には裕福です。けれども、心が貧しかったのです。けれどもまた、当時は貧しい小作農のような人たちは数多くいました。物質的な事も含めているけれども、もっと広い意味での「貧しさ」です。ですから、先に人目に目立つようなことをして信じさせるようなことは、決してなさいません。

そしてその良い知らせはどのような内容なのでしょう？一言でいうならば、「解放」です。捕らわれ

人には解放であり、目の見えない人は目が見えるようになり解放されます。それから虐げられている人が自由の身とされます。これらが解放であり、新改訳の第三版では「赦免」と訳されていました。これまで負い目を持っている人々、苦しんでいる人々、悲しんでいる人々、縛られている人々が解放されることです。これからイエス様は、いろいろな霊的に縛られている人々に会われます。そして、「主の恵みの年」というところは、レビ記 25 章にあるヨベルの年が背景にあると考えられます。ヨベルの年には、これまで土地を売り払ってしまったイスラエルの人々が、元の土地にすべて買い戻され、土地に戻ることができるという教えです。つまり、すべてが一新されて、回復される時です。そこから、神が初めに天と地を造られて、サタンに売り渡されたしまった人々、また被造物がキリストが来られることによって、サタンの脳天を打ち砕き、捕らわれている人々がすべて元の状態に戻される、回復の時であると言えます。

そうです、イエス様は人々に罪の赦しを与えられます。そしていろいろな意味での解放を与えられます。そこには、解放された者たちの喜びがあります。イザヤ書では、神が王としておられること、シオンに来られることが良き知らせとも宣べられていますが、イエス様がまことの主、まことの王として心に受け入れ、従う時に、その人の過去がすべて赦免されて、初めの神に造られた自分を取り戻すのです。

20 イエスは巻物を巻き、係りの者に渡して座られた。会堂にいた皆の目はイエスに注がれていた。
21 イエスは人々に向かって話し始められた。「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。」

イエス様は朗読された後に、解き明かしのために座られました。ユダヤ教ではラビが座って、教えられます。かなりみな、イエス様が言われることに注目しています。そして、「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。」と言われたのです。今ここで、新しい恵みの時代が来た。赦免と解放の時が来たと明言されました。そしてご自身が、その油注がれたキリストであることも暗に示しておられます。これが良き知らせです。赦免と自由を与えるイエスが自分の心に、自分の生活に来られることです。

ところで、ここでイエス様は、イザヤ書の預言を途中で朗読をやめておられます。「61:2 主の恵みの年、われらの神の復讐の日を告げ、すべての嘆き悲しむ者を慰めるために。」とあるのです。主の恵みの年のところで読み、復讐の日については読まれなかったのです。バプテスマのヨハネが、後から来る方は聖霊と火によるバプテスマを授け、粉殻のように悪者は吹き飛ばされ、火で焼き尽くされることを伝えましたが、イエス様はそのことはご存じですが、すでに罪の中で痛んでいる人、また罪からの影響で苦しんでいる人、サタンの影響の中にいる人々、いろいろな意味で縛られている人々を解放するという働きを、今、行われています。神の復讐はその後のことです。

2C 外で行われる御業 22-30

22 人々はみなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いて、「この人はヨセフの子

ではないか」と言った。

ナザレの人たちは初め、その恵み深い言葉に驚きました。こんな恵み深い言葉を語るなんて、と、その言葉に驚いたのです。けれども、「この人はヨセフの子ではないか」としました。これは大きな問題です。彼らは、イエス様が両親に仕えている姿を見ていました。神にも人にもいつくしまれていた、とルカ 2 章の終わりには書いてありますから、決してイエス様に悪い思いを持っていなかったと思います。しかし、それでもヨセフの子ではないか！としたのです。

23 そこでイエスは彼らに言われた。「きっとあなたがたは、『医者よ、自分を治せ』ということわざを引いて、『カペナウムで行われたと聞いていることを、あなたの郷里のここでもしてくれ』と言うでしょう。」24 そしてこう言われた。「まことに、あなたがたに言います。預言者はだれも、自分の郷里では歓迎されません。

郷里では預言者が歓迎されないという諺をイエス様は語られています。そして彼らがイエス様を受け入れていないので、カペナウムでは数多くの癒しの業、人々を解放する業を行われているのに、ナザレでもやってくれという時が来るのだということです。主の働きを妨げているのは、彼らが神の赦免と解放に目を留めて、神をほめたたえるのではなく、人を見ているのです！これが安息日に、神を礼拝する時に起こっていることを思い出してください。つまり、私たちに語りかけています。神は、ご自身を見てほしいのです。そしてご自身を、人々を通して現わされます。人々を用いて表します。ところが神を信じているという者たちが、神ではなく、その用いられている人に注目します。それで、躓くのです。郷里では預言者が歓迎されないということが大事です。つまり、とても近くに住んでいる人、いつも付き合っている人のことです。近ければそれだけ、神を見ることができないという問題があります。神は、恵みによって人を通してご自身の御業を行われるのであり、神に出会ってほしいと願うのです。人がどうこうする問題ではないのです。

25 まことに、あなたがたに言います。エリヤの時代に、イスラエルに多くのやもめがいました。三年六か月の間、天が閉じられ、大飢饉が全地に起こったとき、26 そのやもめたちのだれのところにもエリヤは遣わされず、シドンのツアレファテにいた、一人のやもめの女にだけ遣わされました。27 また、預言者エリシャのときには、イスラエルにはツアラアトに冒された人が多くいましたが、その中のだれもきよめられることはなく、シリア人ナアマンだけがきよめられました。」

イエス様は、ナザレではなくカペナウムで働きをされることを言われただけでなく、イスラエルの外で解放の働きを神が行われた話をしておられます。エリヤの時代、またエリシャの時代にそれが起こりました。それぞれがもちろん、イスラエルの預言者です。ところが、イスラエルの人々のところではなく、シドンの女のところ、シリア人ナアマンのところ、に届かれました。

28 これを聞くと、会堂にいた人たちはみな憤りに満たされ、29 立ち上がってイエスを町の外に追い出した。そして町が建っていた丘の崖の縁まで連れて行き、そこから突き落とそうとした。30 し

かし、イエスは彼らのただ中を通り抜けて、去って行かれた。

なぜナザレの人たちが憤りに満たされたのでしょうか？先ほどは、恵みの言葉に感動して、イエス様を称賛したのに、どうしてこうも変わったのでしょうか？異邦人に神が恵みの働きを行われたことを聞いたからです。ユダヤ人たちは、その解放の働きを異邦人からの支配からの解放として受け止めていたために、むしろ異邦人に届き、イスラエルには届かなかったことを聞いたので、怒り狂ったのです。この崖であると言われるところで、私は小メッセージをしたことがあります。それは、「神の恵みは人を怒らせる」ということです。神は罪人を救う働きをされます。人々を癒す働きをし、捕らわれている人々を解放する働きをされます。その恵みがあまりにも大きいので、それは非常識であるとか、道理にかなっていないとか、妬みと怒りによって出て来ます。恵みについて、表面的にはそればすばらしいことだとナザレの人たちのように反応するのですが、その本質的なところを見ると、自分たちのプライドに触れるので、ものすごく怒ってしまうのです。神の寛容さ、その愛の広さに触れているのに、それに気づかずに自分を中心にして文句を言っています。

3A 教えにある権威 31-44

1B 悪霊の追い出し 31-37

31 それからイエスは、ガリラヤの町カペナウムに下られた。そして安息日には人々を教えておられた。32 人々はその教えに驚いた。そのことばに権威があったからである。

ガリラヤのカペナウムです。ガリラヤ湖の北の岸辺に位置する町ですが、ここが宣教の拠点になります。ここにペテロの家があります。ここに、エジプトからシリアにつながる国際幹線道路、ヴィア・マリスが走っています。北にいくと、シリアのダマスコにつながります。ですから、マタイが取税人で、カペナウムで徴税していましたが、通行税などを収めます。そしてローマ兵もここに駐屯しました。西にはマグダラがあり、ユダヤ人の住む比較的大きな町がありました。そして東にはベツサイダがあり、さらに東はデカポリスといって、ギリシア時代からの都市群の領域になります。異邦人たちが圧倒的に住んでいるところです。ですから、ユダヤ人のところに住みながらも、さほど遠くないところには異邦人もいるようなところを拠点にしていました。後に、四方から、遠くから人々が集まって来ますが、カペナウムは交通の便が良いところでした。

そこで安息日に人々を教えておられました。人々が再び驚いていますが、理由は、「そのことばに権威があった」ということです。他の律法学者は、もっと伝承を教えていました。他のラビがこう言っていると言った話し方をしていましたが、イエス様は、山上の説教にもあるように、「わたしは、言います」と、ご自分のことばだけを権威としていました。主のことばには権威と力があるのです。牧者チャック・スミスは、しばしば、「御言葉を説明したり、擁護するのではなく、使いなさい。」と書いていました。御言葉が御霊の剣であるとエペソ 6 章にあります。剣を守る必要はないのです、これが攻撃用の武器であり、使うのです。御言葉は生きていて、力があるのですから、それを宣言して、しかも確信をもって語るのです。自分ではなく、神のことば自体が人を変えます。パウロはテサロニケの人たちに言いました、「I テサ 2:13 こういうわけで、私たちもまた、絶えず神に感謝し

ています。あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。」

33 その会堂に、汚れた悪霊につかれた人がいた。彼は大声で叫んだ。34 「ああ、ナザレの人イエスよ、私たちと何の関係があるのですか。私たちを滅ぼしに来たのですか。私はあなたがどなたなのか知っています。神の聖者です。」35 イエスは彼を叱って、「黙れ。この人から出て行け」と言われた。すると悪霊は、その人を人々の真ん中に投げ倒し、何の害も与えることなくその人から出て行った。

先ほど悪魔からの誘惑がありましたが、その世界ではイエス様が誰なのかは、はっきりと分かっていました。彼らは、主が神の聖なる方であることを知っていたのです。イエス様は、黙れと命じておられますが、そこには主のきめ細やかさがあります。それは、主ご自身が様々な業によって、その貧しき人々、捕らわれている人々に赦免と解放を与える、その業によって人々に、少しずつご自身によって神を知るようにされているからです。今でこそ、私たちはイエスが神の御子である、キリストであると言っていますが、私たち自身もそれを言葉で聞いていても、果たしてこの方をそのように知っているか？といえ別問題です。単なる呼び名ではなく、事実、神の御子でありキリストなのだということを、人格的に知り、この方に自分を明け渡しても良いとそこで決断できるのです。

興味深いのは、主がおられるというだけで、彼らには、「私たちを滅ぼしに来たのですか。」と脅威になったことです。主がそこで意図的に彼らを追い出そうとおられるのではありません。そこにおられて、ご自身の霊的な支配が及んで、それで自分たちの権威と力が及んでいるところに入り込んできていたからです。「私たちと何の関係があるのですか。」とも言っていますが、「ほっといてほしい」ということですね。それは自分たちの闇の部分が光によって明らかにされているからです。私たちが主の福音の中に生きる時に、自分たちで意図していないのに、悪の勢力や汚れた勢力が暴れ出すということは良くあることです。

主が彼を叱ったら、悪霊が出ていきました。使徒の働きでは、イエスの御名によって叱りつける使徒たちの姿があります。私たちも同じです、悪霊に遭遇したら、自分の能力は関係ありません。イエスご自身の御名の力によって追い出すのです。

36 人々はみな驚いて、互いに言った。「このことばは何なのだろうか。権威と力をもって命じられると、汚れた霊が出て行くとは。」37 こうしてイエスのうわさは、周辺の地域のいたるところに広まっていった。

人々にとって、こんなことは初めてでした。驚き、あきれています。人々があまりにも当たり前と思っていたこと、ここでは悪霊につかれていることでありますが、それが壊されたからです。このようにして、古い秩序を解放の御業によってイエス様は壊して行かれます。その壊された時に、人々

は驚きます。なんで壊したのだと、否定的に驚く時もありますし、「これは、すごい、神の御業だ」として肯定的にも驚きます。ここでは大方、周辺の地域に広まったのですから、肯定的に驚いたのでしょう。

そしてルカは、主の言葉が広がることについて、使徒の働きでも強調していますが、これが神の御心です。主のことばが力と権威をもって語られ、また信者たちが本気でそこに生きていることによって周囲に広がるのを神は御心にしています。「Iテサ 1:6-8 あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちに、そして主に倣う者になりました。その結果、あなたがたは、マケドニアとアカイアにいるすべての信者の模範になったのです。主のことばがあなたがたのところから出て、マケドニアとアカイアに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰が、あらゆる場所に伝わっています。そのため、私たちは何も言う必要がありません。」

2B 熱病の癒し 38-41

38 イエスは立ち上がって会堂を出て、シモンの家に入られた。シモンの姑がひどい熱で苦しんでいたのので、人々は彼女のことをイエスにお願いした。40 日が沈むと、様々な病で弱っている者をかかえている人たちがみな、病人たちをみもとに連れて来た。イエスは一人ひとりに手を置いて癒やされた。41 また悪霊どもも、「あなたこそ神の子です」と叫びながら、多くの人から出て行った。イエスは悪霊どもを叱って、ものを言うのをお許しにならなかった。イエスがキリストであることを、彼らが知っていたからである。

カペナウムの遺跡がありますが、会堂跡からペテロの家の跡までは歩いて 30 秒ほどのところにあります。そしてペテロがここで、結婚していたことがよく分かります。姑がいるからです。そして、イエス様が彼女の熱を癒されました。ペテロはこの時点で、まだ主の弟子となっておりません。イエス様はこのようにして、ペテロに接して、彼も部分的にイエス様に従っていました(ヨハネ 1 章)。ですから、イエス様は霊的なところに権威があるだけでなく、病という肉体に対しても権威を持っておられました。

このことが伝わり、カペナウムに日が沈んでから人々がどんどんやってきました。ユダヤ人の間では日没で次の日になるので安息日でも歩いてよい距離があり、それより遠くには行けないからです。安息日を待ってからやってきました。そして、イエス様は一人一人に手を置いて病を治されました。これが主のスタイルです、一人一人に対して、しかも手を置くという、優しさ、温かみのある働きです。この姿勢をもって、私たちもイエス様の名によって癒しを祈るべきですね。「ヤコブ 5:14-15 あなたがたのうちに病気の人がいれば、教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい。信仰による祈りは、病んでいる人を救います。主はその人を立ち上がらせてくださいます。もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。」

そして、イエス様が、悪霊どもが神の子だということを黙らせながら、追い出しておられます。その霊の世界と、人々との理解には大きな開きがありました。人々が、本当にイエスがキリスト、救

い主で、そして神の子であるということを知るのは、甦られた時です。弟子たちが、イエス様が甦られたのを見た時です。しかし主はそれまでは、捕えられている人々、虐げられている人々に解放のわざを行われていました。

3B 別の町々 42-44

42 朝になって、イエスは寂しいところに出て行かれた。群衆はイエスを捜し回って、みもとまでやって来た。そして、イエスが自分たちから離れて行かないように、引き止めておこうとした。

夜、ずっとイエス様は病人の癒しと、悪霊追い出しを行われていたのでしょう。けれども、イエス様は朝には、寂しいところに行っておられます。とても大事な働きです。宣教の働き、神の働きをする時には、退いて静かなところに行くことが必要です。大勢の人たちの中にいる時は、次には独りになって神といることが必要です。多くの働きをした時は、休むことが必要です。イエス様の働きには、この外での働きと、神と独りになることの交互、バランスがあったということです。

43 しかしイエスは、彼らにこう言われた。「ほかの町々にも、神の国の福音を宣べ伝えなければなりません。わたしは、そのために遣わされたのですから。」⁴⁴ そしてユダヤの諸会堂で、宣教を続けられた。

群衆たちは、イエス様に居残ってほしいと願っていますが、目的が少し変わっていたのかもしれませんが。癒しをしていただくこと、悪霊を追い出してもらうこと、それ自体が自己目的化していったのではないかと思います。しかし、イエス様は他のところに行かれます。「神の国の福音を宣べ伝えなければなりません」というところです。神の国であります。それが良い知らせです。神の国とは、そこに神がおられて、そこで王となっておられるということです。神が支配しておられる領域が増える時に、そこは神の国であり、そしてそれこそが良い知らせなのです。他のことによって支配されていれば、サタンが支配していれば、そこは捕らわれの人々がいるだけです。主は、そこから解放を与え、神の支配の中に私たちを移されます。

そして宣教というのは、広がりを持つものです。主の恵みを受けたら、そこから遣わされてあふれ出ていくものです。イエス様が一つのところに留まらずに他の町々に行かれたように、私たちも一つの祝福の中にいたら、その他のところに分ち合い、広げ、宣べ伝えるのです。